

識別後フィードバックが遅延写真識別の確信度に与える効果及び二重盲検法の基礎的研究

原 聰
(駿河台大学)

キーワード：確信度・識別後フィードバック・遅延識別・二重盲検法

識別後フィードバックが1週間の遅延写真識別における確信度に及ぼす効果検証と、ラインナップを用いた識別手続における二重盲検法の効果を実証することを試みた2つの研究について紹介し、中間報告とする。

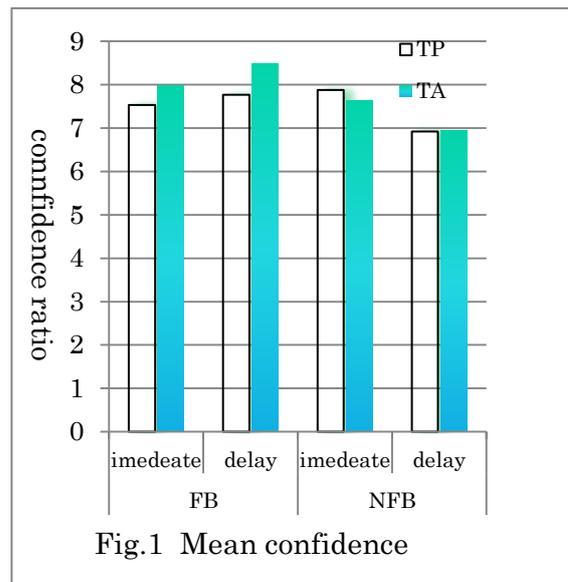
I 識別後フィードバックが遅延写真識別の確信度を与える効果

問題と目的：ターゲットの識別後に与えられる肯定的フィードバック(以下FB)は、識別確信度を増加させる効果を持つことが報告されている(Well & Bradfield,1998)。本実験目的は、FBの効果は、1週間後の遅延識別においても維持され、識別確信度を高めることを検討することである。さらに、我が国における犯人識別は、警察、検察、そして裁判と、時間をかけて反復実施されることが常態化しており、目撃者や被害者による識別に対するFBの効果に関して、識別直後以上に、遅延識別における効果を検討する必要があるとの問題意識を持って本実験を企画・実施した。

方法：フィードバック(あり・なし)とラインナップ(ターゲットあり・なし;以下TGあり・なし)の2要因被験者間計画。実験参加者は50名で、FBなし・TGあり群11名、他の3群は13名を配置した。実験参加者は、「背中を向けて倒れている女性の脇に、黒いバットを持ったTGが立っており、女性を見降ろし、正面を見たのち、画面左手に逃げ去る」8秒間の映像を見せた。次に、2分間の逆唱の後、映像に関する半構造化面接を用いた自由再生を実施した。さらに、7枚の顔写真を1枚ずつ呈示し(順次呈示手続)TGであるか否かを回答させ、その反応に対する確信度を10段階で報告させた。すべての写真に対する反応終

了後、「正解です。良く分かりましたね。」とFBを与えた。1週間後、同様の識別手続を実施した。

結果と考察：直後と1週間後における識別確信度を書く条件群別にFig.1に示した。FB条件で、TGあり、なしのいずれにおいても確信度は高くなっているが、FBなし(NFB)条件ではいずれも低下している($F(1,4)=11.053, p<.05$)。



さらに、キャリブレーションの値を算出すると、全条件で遅延識別において直後識別よりも確信度が過小評価されていることが明らかになった。しかし、過小評価量に着目すると、NFB条件で、FB条件よりも過小評価量が大きいことから、肯定的フィードバックが1週間後の遅延識別における確信度を与える効果として、確信度の過小評価量を低減させることで、確信度の低下を防ぐことにより、FB効果が得られるのではないかと考えた。

II 二重盲検法の基礎的研究

問題と目的：目撃証言が極めて脆く、誤起訴・誤判を生む重要な要因になっていることは、心理学的研究が示してきたところであり、このことは、イノセンス・プロジェクトの報告においても明らかになっている。さらに、目撃証言の危険性を低減させるためには、システム変数のひとつである犯人識別手続の改善が有効であることが提言されている(Wells, 1998)。犯人識別手続の改善において、注目されている一つに、二重盲検法の採用があげられる。二重盲検法とは、取調べ場面においては、犯人が誰であるかに関する情報を持たない取調べ官が犯人識別手続を実施する方法である。心理学研究においては、実験者効果として Rosenthal(1963)によって報告されている。実験者が持つ事前知識や期待が、実験参加者の反応に無自覚的な影響を与え、結果的に実験者の持つ情報や期待に沿った反応を引き起こす効果である。実験者効果が取調べ場面において、無自覚的な誘導を引き起こし、結果的に捜査側が期待する証言や識別結果がもたらされる危険性が指摘され、先に述べた二重盲検法が推奨されている。しかし、この二重盲検法を用いた識別手続の有効性に関する実証的研究は極めて少ない。また、ラインナップを用いた二重盲検法の効果に関しては、これまで推奨されてきた順次・同時呈示との関係で、安定的な結果が得られてきてはいない状態である(Phillips, 1999; Perlini, 2007)。そこで、本研究は、二重盲検法の効果に関して、これまでのラインナップ呈示法との関係を確認する基礎的な知見を得ることを目的として実施した。我が国の犯人識別手続は、依然として単独面通などが主流であるが、今後ラインナップなどのより公正性が高い手続に移行していくことが期待されるであろうから、犯人識別手続に関してより客観的、実証的な知見を得ておくことが必要だと考えた。

方法：盲検法(二重対単)、ターゲット(あり対なし)、呈示方法(順次対同時)の3要因被験者間計画。実験参加者は、各群20名で計160名。実験参加者は、駐車場において車上荒らしを行う模擬犯罪場面を撮影した18秒間の映像を見せた。2分間の逆唱課題の後、事前確信度を10段階で報告させた後、9枚の顔写真を用いた識別手続を実

施した。反応後に再度確信度を10段階で報告させた。第1回目の識別後、再度2度目の識別手続を実施した。実験の全過程はDVD録画した。

結果と考察：第1要因である二重盲検法と単盲検法においては、Hit、FA、CR、Missのいずれにおいても有意な差は見られなかった。順次呈示と同時呈示においては、同時呈示においてFA、Missの比率が高く($\chi^2(1)=5.079, p<.05$)、同時呈示法は、順次呈示法に比べて、誤識別を増加させた。盲検法の効果に関して、反復識別手続において興味深い結果が得られた。第1識別と第2識別において、選択写真の変更の有無を見たところ、二重盲検法に比べて、単盲検法においては有意に多い変更数を示していた($\chi^2(1)=6.788, p<.01$)。反応変化の方向性に関して、(例えばFAからHitなど)有意差は見られなかった。

反復識別は、同一手続きの反復という意味だけに収まらない効果を持っている可能性がある。犯人識別手続を実施しているのであるから、実験者が再度識別を実施するように依頼することは、「最初の反応は誤りであり、その反応の変更の必要がある」という課題要求が発生する可能性がある。子供の証言において、同一内容の反復質問において、子供が証言を変更する傾向は、こうした反復が持つ効果を表している(反復効果)。しかし、単純な反復効果が本実験結果に生じたとは言えない。反復効果によるのであれば、二重盲検法条件においても、反応変更が生起するはずであり、単盲検法条件にのみ生じたことは反復効果によって説明することができない。また、複数の実験者を用いていたが、これらの実験者間で反応変化数に偏りは見られない。

実証的に二重盲検法の効果を検出することは、かなり困難であり、単純な手続きでは検出できないだろうことは想定していた。そこで、我が国の識別手続きにおいて常態化されている反復識別を導入しようと考えた。実務で採用されている、こうした手続きを用いたことで、本実験において盲検法の効果の違いを数量的に生起させたのではあるが、この結果を説明できる根拠は未発見である。全実験のDVD録画の詳細な分析を現在実行中であり、それらの分析結果などを待って結論することとしたい。